

Title	アベラールの「ディアレクティカ」における,すべての真なコンセクエンチアは,永遠に真である,という主張をめぐって
Sub Title	La dialectique d' Abelard : Omnes vere consequentie ab eterno sunt vere
Author	町田, 一(Machida, Hajime)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1997
Jtitle	哲學 No.101 (1997. 3) ,p.45- 63
JaLC DOI	
Abstract	Quel est le critere qui permet de dire si une verite est eternellement necessaire ou non? Pour Abelard, il insiste sur ce point, la necessite eternelle consiste dans les vraies consequences qui dependent de la nature de chose. Et il lui a fallu distinguer les verites categoriques des vraie consequences necessaires. Car les verites categoriques demontrent seule la realite de chose. Je veut debrouiller les fils de ces sujets, eusuite je veut eclaircir comment on arrive a connaitre la nature de chose.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000101-0045">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000101-0045</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アベラールの「ディアレクティカ」  
における、すべての真なコンセク  
エンチアは、永遠に真である、  
という主張をめぐる

町 田

—\*

### La dialectique d' Abélard

—Omnes vere consequentie ab eterno sunt vere—

*Hajime Matida*

Quel est le critère qui permet de dire si une vérité est éternelle-  
ment nécessaire ou non? Pour Abélard, il insiste sur ce point, la  
nécessité éternelle consiste dans les vraies conséquences qui dépendent  
de la nature de chose. Et il lui a fallu distinguer les vérités caté-  
goriques des vraies conséquences nécessaires. Car les vérités caté-  
goriques démontrent seule la réalité de chose.

Je veut débrouiller les fils de ces sujets, ensuite je veut éclaircir  
comment on arrive à connaître la nature de chose.

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程 (哲学)

\* 日本学術振興会特別研究員

中世論理学者、あるいはスコラ論理学者と古来呼ばれてきた連中が、「普遍」の追究に邁進しては後退を余儀なくされ、ことばの「表示・代表」理論の完成に心血を注いでは頓挫の憂き目を見ていた事実は、その内実はともかく、よく知られている。一方で、彼らが特に13世紀以降、「コンセクエンチア」の名の下に、条件命題から、三段論法、広く言えば推論一般の型式化とその洗練にも腐心していたことを物語る数多の事実を知るひとは、少ないようである。わけても、アベラール(1079-1142)が、既に12世紀初頭に、独自の「コンセクエンチア」理論を築きあげつつあったことは特筆すべきであろうが、しかし、この事実を知るひとはさらに少ないようである。

私がこの小論で明らかにしたいことは、アベラールがその「コンセクエンチア」理論において、定言命題の真理と条件命題の真理との峻別を要請し、特に条件命題の真理は必然的でかつ永遠である、と主張したことの意味である。さらに、これをよりどころとして、ものの本性についての我々の知識ですら、帰納的に得られるものではない、とアベラールがおそらくは考えていたと私には思われる点について述べ、中世論理学史のほんの一断面を垣間見る試みの模索として以下に示したい。

## I

まず、アベラールの「ディアレクティカ」<sup>(1)</sup>におけるコンセクエンチア<sup>(2)</sup>の扱いについて、必然性とのかかわりから検討したい。

次の推論をみてみよう。

「もし人間であるならば、動物である」<sup>(3)</sup>

この時、推論は、条件の力 *vis conditionis* によって命題と命題との自然な連言 *coniunctio naturalis* をもつと言われる条件命題と同義である

が<sup>(4)</sup>、上の例では、条件の力に相当するものを推論の力 *vis inferentie*<sup>(5)</sup> とアベラールは呼んでいる。そしてこの推論の力のために、推論は必然性において成立すると述べている。

それゆえに（推論の力＝条件の力のために）推論は、ちょうど連鎖することによって示される仮言命題（条件命題）において言われるのと同じく、前件の意味から、後件の内容が要求されることが明らかである限り、結合の必然性において成立するのである<sup>(6)</sup>。

こうして、推論としての条件命題が必然的様相を帯びると言われるのだが、アベラールがこのように述べる場合、必然性とはどのような身分をもつものなのか、考えてみたい。

彼によれば、先の推論は、「ものの本性によって」*ex rerum natura* 必然性を保つ<sup>(7)</sup> のであって、さらには、こう叙述されている。

我々が「もし動物であるなら、魂がある」と言う時、少なくとも、ものの本性について知った限りにおいて、そのコンセクエンチアの真理を我々は確信しているのである。というのも、我々は動物が魂なく自存することができないことが明らかなのを、理解しているからである、……<sup>(8)</sup>

「我々がものの本性について知った限りにおいて」つまり、ものの本性についての知識を前提に、コンセクエンチアの真理を我々は「確信している」ということになるのだろうが、しかし、注意すべきは、ものの本性についての知識と、ものの本性から必然性が、コンセクエンチアにおいて成立することとは全く別だということであって、次にみるように、アベラールの言う必然性とは、何ら認識的様相を含んではいないのである。

例えば、「必然的（に）」という副詞の分析から必然性についての解明を彼は試みようとする。

……だが、この命題、「ソクラテスが物体であることは必然的である」、を真としよう、というのも彼が物体である時は、物体なしに存在しえないからである。しかし、たとえ我々の教師が賛成しようが、私にはこの命題は完全に偽だと思われる。なぜならば、永遠であるようなものにおいては、ただ必然性だけが、そのことを（永遠であることを）引き起こすからである。これに対して、ソクラテスは常に物体の状態ではなかったのである、あったより以前に、物体はなかったのであるから。というのも全く何もなかった時には、物体があることなど可能ではなかったのであるから。従って私には、「必然的」、即ち、必然性に起因するものとは、次の如く解明さるべきと思われる、そのものが別の様にはありえない、つまりあるのではないことが可能ではない、あたかも神が必然的に不死であるように、不死であることが別の様にあることが可能ではない、即ち不死でないということがたまたま起きたりしえない、というように。<sup>(9)</sup>

ソクラテスは詐欺師に成りえたし、泥棒でもありえた。彼の偶有的性質として可能だったと言える。しかし、アベラールは彼が物体であることすら、必然的だとはみなさない。彼が存在する以前には、彼は何ら物体ではなかったのだから、彼は物体とは「別の様に」、つまり、物体でなくありえたのである。彼が物体であることから、必然的様相は全く導かれないのであり、「必然的」とは、例によれば神が死ぬべきものではありえない、即ち、不死であることが不可避 *inevitabilis* である様態を指しているのである<sup>(10)</sup>。

同時に、アベラールは、現実的に何者かが「人間であること」からも一

切、必然性は帰結されない、と考えているようにも思われる。

……他方、「必然的」が本来の様態と思われうるのは、本性における部分を形成する時である、本性における「必然的に人間であること」が、「人間であること」の部分であるのが明らかなように。従って、もし必然的に人間であるのなら、人間であることが帰結される。しかし、逆はそうではない。さらに、本性における部分と我々が言ったのは、次の限りにおいてなのだ、即ち、もしものの現実を我々が考えるのなら、何ものも必然的に人間であることなど我々は見出さないのである。ゆえに、必然的であることが何らかの様態であることが明らかな時は、「必然的」は、意味の固有性に関する限り、適合した様態なのである。<sup>(11)</sup>

例えば、ソクラテスが、現実のもの *res* として、「人間であること」から、彼が「必然的に人間であること」は導かれぬ。彼の、「本性における部分」とは、「必然的に人間であること」であって、現実的に「人間であること」ではない。これがどういうことなのかについては、真な条件命題が、必然的で永遠である理由と共に、後にふれたい。

いずれにせよ、アベラールの言う必然性は、この小論の範囲においては、ものの本性にまつわる不可避の様相を指しており、ものの本性の知識の介入を要する認識の様相ではないと言える。ものの本性についての知識から、我々がコンセクエンチアの真理を確信するのと、コンセクエンチアが、ものの本性から必然の様相を帯びるのは、全く別のことである。一方で私は、ものの本性の我々の知識は、ものの実在を前提せず、現実の個物から引き出されるものではない、とアベラールにおいては考えられていたことを示してみたいのであるが、その前に、上述の如き必然性がどのように条件命題とかかわるのかをみてみよう。

## II

条件命題の真理について、次のようにアベラールは言う。

……他方、(命題と命題との)結合の真理は、前件において言われているものが、後件において措定されているものなしには、ありえないことが明らかである限り、必然性において保たれる。例えば、「もし人間であるならば、動物である」というコンセクエンチアが措定される時、動物であることなく、人間が存在することなどありえない、ということがこのコンセクエンチアには、それゆえに、必然的に認められるのである。<sup>(12)</sup>

後件なしには前件がありえない限りにおいて結合の真理は必然的である、この主張は、後件の必然性が要求されることと、結合全体の真理が必然的であることとの明らかな区別に基づいていると思われる<sup>(13)</sup>。この点を次に詳らかにしてみたい。

アベラールによれば、条件命題の真理が必然性において成立するという考えは、ボエチウスに端を発している。(次の引用「 」内がボエチウス)

……「条件命題において、我々が理解しているものは、もし人間と言われる何らかのものがあつたのなら、動物と呼ばれる何かが必然的に、ある」つまり、こういうことだ、即ち、名指されていることばは、実体の概念によって充足されるのである。そして、この必然性は、結合全体のものであって、定言である後件命題のものではなく、前件から必然的に後件が出来ると理解されるのが、明らかであるような、人間であるところのものに動物性が必然的に内属しているようなものでもないのだ。こうしたことは、もちろん、間違っているので

ある. ....(14)

「間違っている」のは、後件の必然的様相と、結合全体の必然性とを混同することである。というのも、「もし人間であるならば、動物である」、この条件命題においては、現実的に「人間であること」から、「必然的に動物であること」が帰結される、と言われるのでもなく、「人間であること」に「必然的に動物であること」が内属している、と言われているのでもなく、これらのことは、必然性が「本性における部分」を形成するというアベラールの主張と相容れないのであって、つまりは、現実のもの *res* として何者かが「人間であること」からは、その者の「本性における部分」即ち「必然的に人間であること」が帰結されないからである。従って、「必然的に動物であること」も帰結されないことにもなる。これを書いている人間の私は、必然的に人間なのでもなく、必然的に動物でもない、という一見謎めいているような主張をアベラールはしているのだ。

この謎を解く鍵は、「実体の概念によって」という、ボエチウスを注釈してアベラールが述べたことばにあるのではないか？ 後件なしには前件がありえない、という説も、実体の概念次元での何がしかの必然的結合に密接にかかわるのではないのか？

……「仮言命題（条件命題）の必然性と、その相互関係において連結されるようなそれら命題どもの関係は、コンセクエンチアを要求する。従って、私が『もしソクラテスが坐っているのならば、同時に彼は生きている』と言う時、彼が坐っていることも、生きていることも、必然的にではないのである。」ちょうど、我々がコンセクエンチアが必然的である、と言っているように、この必然性は後件部分に対してではなく、コンセクエンチア全体の内容に対して持ち出されていることは明らかである。(15)

この叙述からはっきりと、条件命題の必然性が、その全体の必然的様相を指していることがうかがえる。ソクラテスが坐っていることから、「必然的に坐っていること」も「必然的に生きていること」も帰結されないことを説いているのは、先の場合と同じである。「実体の概念によって」ということは、文字通り、現実のものにかかわることなく、条件命題の必然的様相に結びつくのであり、「コンセクエンチア全体の内容」とは、ものの実在の次元ではなく、概念の次元において言われているように思われる。

……すなわち、森羅万象すべてのものが消滅しても、「もし人間であるならば、動物である」。このようなコンセクエンチアは、不変の結合を保つのであって、何であれ真なコンセクエンチアは、永遠にかつ必然的に真なのである。……<sup>(16)</sup>

前に述べた、必然性が「本性における部分」を形成し、ものの現実からは必然性が帰結されないのは、ものの現実、即ち実在のものが前提されることなく、真な条件命題が、永遠にかつ必然的に成立するからである。「もしソクラテスが人間であるならば、動物である」、例えばこの時、彼が「必然的に人間であること」も「必然的に動物であること」も導かれないのは、そもそも彼の物的存在自体が何の必然性も持たないからである。つまり、永遠ではないからである。永遠なのは、「何者かが人間であるのならば、それは動物である」、ここにおける人間概念と動物概念との結合なのである。「不変の結合」は、全体の結合の必然性において言われているのである。問題はそれらの概念が、どのような形をとって結合されるのかであろう。なぜ、アベラールは条件命題の形式に執着したのか、定言命題との対比を通じて考えてみたい。

アベラールは、実は、定言命題と条件命題とは、それらの真理が示して

いるものによって区別されるべきであると説いている。

- a. 「すべての人間は動物である」
- b. 「もし人間であるならば、動物である」<sup>(17)</sup>

これら両命題は、通常、同義とみなされるが、アベラールはどう区別しようというのだろうか。この点を考える手がかりとして、全称命題における「すべての」‘omnis’を彼がどう解釈したのかを探ることがポイントになるように私には思われる。参考箇所をひろい挙げて検討してみよう。

……すなわち、「すべての人間」において「すべての」が（語順として）先行するとき、もしそれ自身が注目されるのなら、いかなるものもそれ自身排除されない、ちょうど「すべてのもの」と言われる時のように。すなわち、あたかも「死ぬべき理性的動物であるところのすべてのもの」と言われるように。……例えば、「すべての人間」と言われる時、言わば複合物の名前によるかのように「すべての人間」によって個々の人間について我々が論じる時、その全称命題で言われていることにおいては、すべて（の人間）に関して、何ら排除されることなく、何者かが措定されているのであるが、一方で、特称あるいは単称（命題）は、ある者に関して、非確定的にか確定的にか措定しているのである。……また例えば、「おのおのすべての人間ども」と言われる時、誰であれその数に応じて、実際に、この2人、あの3人と任意に我々は集めているのである。……<sup>(18)</sup>

「すべての人間」において、人間は実在のものとして排除されることなく個々の存在が前提されなければならない。なぜなら、存在しない人間を「集める」ことはできないのであるから。全称定言における、全称の意味

は、そこで名指されている個体どもの集合の全体において考えられている。つまり「すべてのPはQである」という命題は、Pの存在の前提が必要であり、そのすべてのPがQであることが不可欠であることを示している、とアベラールは言っているように思われる。

ここにおいて私が疑問に思うのは、アベラールの実証的態度はともかく<sup>(19)</sup>、全称定言における、その全称的性質が、ものの本性と同義であるか、という点である。例えば、「すべての人間は動物である」、この全称定言は、人間の本性（あるいは定義）を示しているのだろうか？そして、そうした個々の人間の存在を前提にした全称的性質を通じて、クヌティラのことばを貸りれば「帰納的抽象」<sup>(20)</sup>を通じて、我々はものの本性についての知識を得るのだろうか？

そうではないのである。

ものの本性の我々の知識ですら、個物の存在を前提してはいないのである。

今まで述べてきた、真な条件命題における永遠的必然の様相をふりかえりつつ、特に条件命題と定言命題とにおける真理の相違についてのアベラールの見解をもとに、私はものの本性についての知識が「帰納的抽象」によって得られることにはならない、と結論として次に示してみたい。

### III

先に挙げた a. b. の命題を想い起こされたい。アベラールは a. における 'est' をことばの連結 copulatio, b. における 'Si est' を条件の連結と呼び、以下のように説く。

……すなわち、条件の連結とことばの連結との、この区別は明らかである、というのも、後者は述定においてももの内属性の現実のみを、また前者は結合の必然性を措定しているからである。こうして「……

である」ということばによって、「動物」と「人間」とが連結されている時はその内属性の現実のみが示されており、一方「もし……ならば」という条件によってそれら同じものが結びつけられている時は、不変な結合の必然性が明らかにされているのである。その上、必然的であるものとは、始まりを決して創らない永遠なものなのである。従って、この真なコンセクエンチア、「もし人間であるならば、動物である」が措定しているものも必然的なものである、論じられているところのただもの自体のみが、あろうがなかろうが、(真なコンセクエンチアは) 永続する、と言われることが常である限りにおいて、そしてすべての真なコンセクエンチアは、永遠に真なのである。他方、定言命題の真理はと言えば、それはものの実在にかかわるものの現実を措定しており、それらのものともどもと同時に、生起しては消滅するのである。仮言命題(条件命題)は終わりも始まりも創らない。ゆえに、人間と動物とが創造される以前か、あるいは全く消滅してしまった後でさえも、このコンセクエンチア、「もし人間が死ぬべき理性的動物であるならば、動物である」が措定するものは、等しく、真理において成立しているのである。この時、動物自体であることなしに、何であれそうした動物であることなど決してありえないのは当然なのである。<sup>(21)</sup>

定言命題の真理は、ものの内属性の現実を、条件命題の真理は、永遠かつ必然的な(先の引用によれば、「実体の概念」による)結合を示す。a. と b. とは不変でありうるかどうかにおいて区別される、というのも、a. は「すべての人間」の消滅と共に、その真理は消滅する、と言うのであるから。

定言命題の示す、ものの内属性の現実、その内属性 *inherentia* に関しては、次の如し。

……しかし、「動物」は人間自体が全く成立していない、まさにその場合に限って、「人間」から切り離される。こうしてもものの消滅のみが除去するような、そんな内属性を、自然の法則は要求するのである。……<sup>(22)</sup>

例えば、「動物が人間に内属する」とは「人間が動物であることに他ならない」<sup>(23)</sup> ののであるが、内属性はものの消滅と共に除き去られると言われている。つまり、実体の概念には影響を及ぼすものではない。

しかし、実体は内属性を必然的に要求したりしない。というのも実体は基底として本性において先行しているのであるから。実体より大きいもの（概念）など、他にないのである。<sup>(24)</sup>

ものの内属性の現実とは、つまるところ、定言「PはQである」におけるQのPに対する関係が現実のもの res において明らかにされていることを指しているように思われる。アベラールのいう「自然の法則」は、ものの存在を前提として要求しているのであり、「本性において先行する実体」にかかわるものではないことにもなる。

……従って、その (b. のコンセクエンチアの) 必然性は明らかなのである、それはもののいかなる現前がなくても、欠如によっても、変化されえないのである。……定言命題と仮言命題（条件命題）とのこの相違から明らかなのは、先に述べたように（注21）、前者はものの内属性の現実を、後者は、述べたように、ものの消滅によってもそれ自体不変であり続ける、結合の必然性を示している、ということである。<sup>(25)</sup>

以上のように、「ディアレクティカ」に限って言えば、アベラールは（全称）定言命題と条件命題とは、前者の真理はものの現実のみにかかわりかつ変動的であるが、後者における真な結合は、ものの存在にかかわらず、「実体の概念」で充足されることによって、必然的様相を帯び、かつ不変である、と考えている。さらに、アベラールは、ものの本性についての知識も個々のものの内属的現実を通してではなく、あるいは全称定言を通してではなく、条件命題において示される必然的結合によって我々は、得ると考えているように、私には思われる<sup>(26)</sup>。次の見解を吟味してみよう。

……すべての白鳥には、偶有性によって、白さが内属するか黒さが全く欠如しているかであるがゆえに、このコンセクエンチア、「もし白鳥であるならば白い」も「もし白鳥であるならば黒くない」もどちらも真とは措定されえないのである。白さを除外してもその基底自体そして本性において先行しているために白鳥の実体は存在しうるのである、どこであれそのこと（白鳥は現に白いということ）が見い出される時であっても、ゆえに、ものの現実は必然性の解明には十分ではないのであるから、結合における犯されがたい力は、本性に残されているのである。<sup>(27)</sup>

我々が白鳥の本性を知るのは、そこいらにいる白鳥の、それが現実的に白い鳥である、という事例の枚挙を通してではない。その白さは偶有的でしかなく、白鳥の本性とは、白鳥の実体としての存立可能性、つまり白鳥の概念の成立に密接に結びついているのである。我々人間がその本性を知るのは、「白さを除いても」「本性において先行する」「白鳥の実体」の存立可能性を示す、「もし白鳥であるならば、鳥類である」というおそらくこの条件命題を通してなのではないか。なぜなら、「すべての白鳥は、鳥

類である」も「すべての白鳥は白い」も白鳥の現実のみを示しているばかりであり、ましてや「もし白鳥であるならば、白い」も「もし白鳥であるならば黒くない」も真な条件命題ではありえないからである。白鳥の本性についての知識は、真な、永遠の結合を保つ条件命題を通して、つまり白鳥の存在を前提せずに、我々に得られることになるのではないか。「帰納的抽象」の説は、ものの存在が前提される全称定言についてのアベラールの見解から導かれたと思われるが、そこにおいて我々に持たれるのはものの現実の知識ばかりであり、その知識は、決してものの本性についての知識と同じではないのである。

こうしてアベラールは、定言命題と条件命題とはそれらの示す真理が、必然的であるか、ないかにおいて区別され、全称定言であっても、その真理はものの消滅と共に消滅するが、条件命題はものの存否にかかわらず、その結合の不変性を、「名指されていることばが実体の概念によって充足される」、この限りにおいて必然的に保つ、と説いたのだと言えよう。私には、これらのアベラールの主張は、12世紀とそれ以降においても極めて示唆に富むように思われ、エロイーズと共に彼の独創と才知を贅えたい。しかし、私はものの本性の知識についての彼の主張には首肯けても、必ずしもその条件命題の扱い自体については、命題の次元と概念の次元とがどうかかわるのか明らかでない点など不明瞭と言わざるをえない<sup>(28)</sup>。それにもかかわらず、そもそも命題の成立と概念の成立とは何か関係があるのか、主語と述語とは何を介して結びつくのか、果して定義とは何か、といったことを考えるための端緒として、アベラールの論理思想は、私にはなかなか面白く思われるのである。

注

- (1) *Dialectica*, 3rd ed, 1135-1137, Paris; ed, L. M. de Rijk, Assen: Van Gorcum, 1956, 2nd ed, 1970. 以下では D. と略す.

- (2) 本稿ではコンセクエンチア *consequentia* と条件命題, 及び推論 *inferentia* とが明らかに同一のもの, 即ち, 'Si est a, est b' を指している場合のみを扱う。また仮言命題が, 条件命題と同義の場合も含む。cf; D. p. 253
- (3) D. p. 253 'Si est homo, est animal'
- (4) D. p. 472 注(2)参照, 「条件の力」とは'Si'を指す。
- (5) D. p. 253
- (6) *ibid.* *Inferentia itaque in necessitate consecutionis consistit, in eo scilicet quod ex sensu antecedentis sententia exigitur consequentis, sicut in ipotetica propositione dicitur, ut in sequentibus monstrabitur.*  
*consecutio* を, 結合と訳す。この先 *consequens* 後件との混同に注意されたい。結合は, 命題と命題とのつながりの条件付連結とでも呼ぶべきものを指している。尚, 訳中の ( ) は, 以下, すべて筆者補注。
- (7) D. p. 255
- (8) *ibid.* *Cum enim dicimus: 'si est animal, est animatum', quantum quidem ad rerum naturam quam novimus, de veritate consequentie certisumus, quia scilicet animal sine animato non posse subsistere scimus, .....*
- (9) D. p. 200-201  
*.....Sed sic vera erit hec propositio: 'necesse <est> Socratem esse corpus'; cum enim sit corpus, non potest existere sine corpore. Atque falsa michi omnino videtur illa propositio, quamvis Magistro nostro<sup>1</sup> placeat. In his enim que sempiterna sunt, solis necessitas ista contingit. Socrates autem semper corpus non habuit, quia, antequam esset, non erat corpus; cum enim omnino non esset, corpus esse non poterat. Videtur itaque michi sic exponendum 'necessarium' quod illud ex necessitate est <illud> quod ita est illud quod non potest aliter esse, idest non potest non esse, ut Deus necessario immortalis est; sic enim est immortalis quod non potest aliter esse, idest non potest contingere ut non sit <im> mortalis.*
- (10) D. p. 194  
*.....'Necessarium' autem id dicit quod ita sit et aliter esse non possit. Hoc loco 'necessarium' idem accipiatur quod 'inevitabile';*
- (11) D. p. 195  
*.....'Necessario' autem proprie modus videri potest, cum partem in natura faciat, ut scilicet 'necessario esse hominem' pars sit in natura*

'esse hominem'. Unde si necessario est homo, consequitur ut sit homo; sed non convertitur. In natura autem partem diximus, eoquod, si actum rei consideremus, nichil esse hominem necessario inveniemus. Est itaque 'necessario' quantum ad sensus proprietatem recte modus, cum videlicet esse necessario sit esse aliquo modo.

尚、「本来の様態」ではないものの例が, vere, falso である。というのもこれらは, 命題に対して言われるべきもので, 意味 sensus に対して言われるべきものではないのだから。cf. D. p. 194-195. 'sensus'については, 注(14)参照。

(12) D. p. 271

.....; consecutionis autem veritas in necessitate tenetur, in eo scilicet quod id quod in antecedenti dicitur, non potest esse absque eo quod in consequenti proponitur; veluti cum talis proponitur consequentia:

*'si est homo est animal',*

hec consequentia inde necessario conceditur quod non potest esse ut homo existat nisi etiam animal fuerit.

(13) おそらくアベラールは,  $\Box[(\forall x)(Px \supset Qx)]$  を, 結合全体の必然性において考えている。そしてこれが真なのは広義には largior 後件なしに前件がありえない時, 厳密には strictior 前件自体が後件が真であることを要求する時である。D. p. 283-284

(14) D. p. 272-273

.....: "in conditionali vero illud intelligimus quod si fuerit aliqua res que homo dicatur, necesse sit aliquam esse que animal nuncupetur", idest sit: nuncupativum enim verbum sensu substantivi fungitur. Et hec quidem necessitas totius est consecutionis, non enuntiationis consequentis categorice, ut videlicet necessario consequens ex antecedenti provenire intelligatur, ut animal necessario inesse ei qui fuerit homo; hoc enim falsum est. ....

„ ”; Boetius, 'De Syllogismo Hypothetico' ed, Migne, C 833, A<sup>13-16</sup> 以下 DSH. と略す。

尚, sensu substantivi 実体の概念によって, の sensus は, 注(11)におけるそれとは, 用いられ方の文脈が違うように思われる。ここでは, 以下の論旨において用いられる「概念」の原語として挙げておく。

(15) D. p. 273

..... "Necessitas vero, inquit<sup>3</sup>, ipotetice propositionis et ratio earum pro-

positionum ex quibus iunguntur inter se connexiones, consequentiam querit; unde cum dico: *'si Socrates sedet, et vivit'*, neque sedere enim eum neque vivere necesse est", ut videlicet necessitas ista non ad consequentem partem, sed ad totius consequentie sententiam inferatur, ac si dicamus necessariam esse consequentiam. ....

“ ”; DSH, C843, B<sup>1-5</sup>

(16) D. p. 160

.....Omnibus enim rebus destructis incommutabilem consecutionem tenet huiusmodi consequentia:

*'si est homo, est animal'*,

et quecumque vere sunt consequentie, vere sunt ab eterno ac necessarie, ut in *Ypoteticis nostris*<sup>1</sup> aperiemus. ....

(17) a. 'Omnis homo est animal'.

b. 'Si est homo, est animal'.

(18) D. p. 188-189

.....Cum enim in *'omnis homo'* *'omnis'* preceedit, si per se ipsum attendatur, nulla res in ipso excluditur, sicut et cum dicitur: *'omnis res'*. Tale est enim ac si diceretur: *'omnis res que est animal rationale mortale'*.

.....

.....Veluti cum dicitur *'omnis homo'*, per *'omnis homo'* tamquam per compositum nom de singulis hominibus ageremus in ea que universalis propositio diceretur, quod de omnibus nullo excluso proponeretur aliquid, particularis vero vel singularis, quod de aliquo indeterminate vel determinate proponeret. ....

Veluti cum dicitur: *'omnes homines'*, profecto et hos duo et illos tres et quotlibet colligimus secundum quemlibet eorum numerum.....

(19) 「すべての人間」を「集める」ことが可能かどうかということは、むしろ「人間」の定義にかかわるといえる。つまり、何をもって「人間」と呼ぶか、ということにかかわる。アベラールの定言命題の説に疑問が湧くのは、このような場合である。

(20) .....According to Abelard, we obtain our knowledge of the nature of things through inductive abstraction and our knowledge about what nature in general allows is derived from what in fact has been exemplified in some individuals. ....

Knuuttila, S, 'Modalities in Medieval Philosophy' Routledge, London,

1993. p. 91.

尚, ものの本性とももの本性の知識との区別については注(26)参照.

(21) D. p. 279

.....Hec enim clara est conditionis et verbi copulationis discretio quod illud quidem in predicatione solum actum rerum inherentie, hec vero necessitatem consecutionis proponit. Cum ita per *'est'* verbum *'animal'* *'homini'* copulatur, actus tantum eius inherentie demonstratur; cum vero per *'si'* conditionem idem eidem coniungitur, incommutabilis consecutionis necessitas ostenditur. Quod autem necessarium est, sempiternum est nec principium novit. Unde et id quod ista consequentia vera proponit:

*'si est homo, est animal'*,

ita est semper ut dicitur, sive sole res ipse de quibus agitur, permanent, sive non; et omnes vere consequentie ab eterno sunt vere. Cathegoricarum autem propositionum veritas, que rerum actum circa earum existentiam proponit, simul cum illis incipit et desinit. Ypotheticarum vero sententia nec finem novit nec principium. Unde et antequam homo et animal creata fuerint vel postquam etiam omnino perierint, eque in veritate consistit id quod hec consequentia proponit:

*si [est] homo est animal rationale mortale, est animal'*,

cum videlicet nullo modo quodlibet tale animal esse possit, nisi animal ipsa fuerit.

(22) D. p. 280

.....; *'animal'* autem ab *'homine'* non alia causa removetur nisi quia ipse homo non ullo modo consistit. Unde inherentiam, quam sola rei destructio aufert, lex nature exigit, .....

(23) cf. D. p. 124

(24) D. p. 159

Sed neque substantia ex necessitate inherentiam exigit, quippe prior est in natura tamquam fundamentum, neque aliquid, cum maius sit ea.

(25) D. p. 282

.....Unde et earum (sc. consequentiarum) necessitas est manifesta, que nulla rerum presentia vel absentia potest immutari, quod nos ostensuros superius proposuimus<sup>1</sup>.

Patet et ex hoc differentia cathegorice et ipotetice enuntiationis cum

hec, ut supra quoque diximus<sup>2</sup>, actum inherentie rerum, illa necessitate <m> consecutionis ostenderet, que quidem, ut diximus, ipsis quoque rebus destructis incommutatibilis consistit.

- (26) ものの本性とももの本性についての知識は別のことである。ものの本性は「もの」の存在人間の存在にもかかわらないが、ものの本性についての知識は人間に直接かかわるのであるから。ものの本性についての知識は人間の存在が前提されて可能となる。従ってももの本性についての知識が、ものの存在にかかわらないと私が言う時、少くとも、唯一人間の存在は必要である。また、「概念」sensusが人間の心理的作用とは何の関係もないことも注意したい。「人間」の概念は人間が消滅しても永遠のコンセクエンチア、‘Si est homo, est animal’において維持されるのであるから。「人間」の概念を人間が知ることと、「人間」の概念自体とは、また別のことなのである。

- (27) D. p. 283

.....Neque enim, quoniam albedo omni cygno inest secundum accidens vel nigredo omnino abest, vel hec consequentia:

*‘si est cygnus, est albus’*,

vel ista:

*‘si est cygnus, non est niger’*

vere proponi potest; quippe et preter albedinem substantia cygni posset existere utpote ipsius fundamentum et prius in natura[m], etsi ubique cum ea reperitatur. Quia ergo actus rei ad necessitatis ostensionem non sufficit, nature vis inviolabilis in consecutione relinquitur.

- (28) 「実体の概念」と「名指されていることば」と命題とのつながりとは？